

ウィトゲンシュタイン『哲学探究』における 「規則の問題」と「私的言語の議論」の関係について

大石 敏 広

ソール・クリプキは、ウィトゲンシュタインの『哲学探究 (*Philosophische Untersuchungen*)』(以下『探究』と略記)のいわゆる「規則の問題」(第138節～第242節まで)の箇所と「私的言語の議論」(第243節～第363節あたりまで)の箇所についてある解釈を提出し、物議をかもしこととなった。この二つの箇所の関係についてクリプキは、「私的言語の議論」の根本は、それに先立つより一般的な議論である「規則の問題」の部分にあり、「私的言語の議論」では感覚についての特殊な事例が取り扱われていると言う¹⁾。これに真っ向から対立して、詳細な反論を展開したのがコリン・マッギンである。彼によれば、「私的言語」の実質的批判はまさに「私的言語の議論」の箇所から始まるのであり、「規則の問題」の箇所はその批判のための準備にすぎない²⁾。

クリプキは、「私的言語の議論」についての具体的な考察を与えてはいない。そこで本論では、クリプキの主張に反対して提出されたマッギンの「私的言語の議論」解釈を主に手がかりにして、「規則の問題」と「私的言語の議論」の関係をどう見るのがウィトゲンシュタインの趣旨に合っているのかについて考えていきたい。

1

まず、「規則の問題」から「私的言語の議論」への移行の意味をマッギンがどう考えているかを確認しておこう。マッギンは、「理解することは、ある記号に一定の仕方で反応することを正当化する、記号の解釈を与える内的過程ではない。そうではなくて理解とは、記号を人間の自然な傾向に一致させて通時的に使用する実践ないしは慣習に参加する能力である³⁾」というウィトゲンシュタイン解釈をとる。そしてそれに基づいて、「規則の問題」の要をなす第202節が解釈される。第202節でウィトゲンシュタインは次のように述べている。

それゆえ、〈規則に従う〉ということは実践である。そして、規則に従っていると信じていることは、規則に従っていることではない。そしてそれゆえに、人は規則に〈私的に〉従うことができない。さもないと、規則に従っていると信じていることが、規則に従っていることと同じことになってしまうだろうから。

マッギンによると、⁴⁾ここで主張されているのは、「規則に従う」ということは「実践」・「技術の習得」であり、特定の「意識状態」が生じることではないということである。そしてこのことによって、「語を私的な対象に適用する実践を行なう可能性」、つまり「さまざまな場面で自分の感覚を同定し、感覚語を定常的に適用する能力」が排除されるわけではない。「規則の問題」の部分に続く「私的言語の議論」と呼ばれている部分こそがこれを排除するための議論なのである。

2

私は、「私的言語の議論」の核心をなすのは、第256節から第269節あたりまでであると考えている。そして、その中で特に重要なのは第258～9節であろう。いわゆる「私的言語」と考えられる記号を仮想的に導入し、その身分についての具体的な考察を行なっているからである。第258～9節では次のような議論が展開される。

次のような場合を想像してみよう。私は、ある種の感覚が繰り返し起こることについて日記をつけたいと思っている。そのため私はその感覚を「E」なる記号に結びつけ、自分がその感覚を持った日には必ずこの記号をカレンダーに書に込む。——私がまず第一に言いたいのは、この記号の定義を述べることができないということである。——にもかかわらず、私は自分自身に対してはそれを一種の直示的定義として与えることができる！——どの様にして？ 私はその感覚を指し示すことができるのか。——普通の意味ではできない。だが、私はその記号を口に出したり、書いたりして、自分の注意をその感覚に集中する——それゆえ、いわば心の中でそれを指し示す。——しかし、何のためにそのような儀式をするのか。というのは、そのようなことは儀式であると思えないからだ！ でも、定義は記号の意味を確定するのに役立つ。——ところで、そのことはまさに注意の集中によってなされる。なぜなら、そうすることによって私は記号と感覚の結合を自分〔の心〕に刻み付けているのだから。——もっとも、「自分〔の心〕に刻み付ける」というのは、このような出来事を経過すれば、私が将来その結合を正しく思い出すようになる、ということではない。ところが、この場合私にはその正しさについての規準が何もないのである。そこで人は、自分に正しく思われることは何であれ正しいのだ、と言うかもしれない。そしてこのことは、ここでは〈正しい〉ということについて語るができないということではないのである。（第258節）

私的言語の規則とは規則の印象なのか——印象をはかる秤は秤の印象ではない。（第259節）

マッギンは、前章で述べた見地からこれらの節に次のような解釈を与えている。⁵⁾公的に検証可能な物理的対象に関する言葉とは対照的に、話者のみがそれを理解しているとされる言葉（「E」）においては、その使用の場面ごとに一貫した意味でそれが用いられているのかどうかについての何らのチェックもありえない。なぜなら、その言葉の発話者は、その言葉を通時的に同一の対象

に適用しているという印象はもちえても、実際に一貫して同じ対象に用いているということは帰結しないし、その聞き手も、発話者がいかなる感覚をもっているのかを知りえないのだから、同じ対象に一貫して適用しているかどうかについては語れないからである。ということは、「私的言語」の場合には、言語規則が正しく遵守されているかどうかの規準が存在しない、つまり「本当の規則遵守」と「見かけ上の規則遵守」の区別がないということになる。それゆえ、「私的言語」は言語たりえないのである。これに対して、「本物の言語」とは公的に検証可能な対象に言及するものである。言語が言語であるためには、それを一貫した意味で用いているかどうか（同一の対象に適用しているかどうか）ということに関して、公的なチェックの可能性（検証可能性）が必要なのである。

3

マッギンは、本論第1章で述べた見解に基づき、第258～9節の議論を、「私的言語」の発話者はどのようにしてその言語を定常的に同一の感覚に適用していると言えるのかという点についての議論とみなすこととなった。それでは、この解釈は的を射ているのだろうか。

マッギンは当然、「私的言語」を言語として認めないという立場である。ところが、A. J. エイヤーは、「私的言語の議論」についてマッギンと同じ解釈を与えるのだが⁶⁾、その評価に関してはマッギンとは正反対である。つまり彼は、いわゆる「私的言語」を言語として認めるのである。

エイヤーの議論は次のようである⁷⁾。例えば、次のように言われるとする。あなたは、列車の発車予定時刻に関するあなたの記憶を確かめるために、時刻表の該当のページを思い浮べるが、それでは不十分である。そこでさらにそのページの記憶を、時刻表を実際に見て確認しなければならない。記憶の正しさを証明するためには「実際に見て確認する」ということが必要なのである。——ところで、この最後の段階で私は自分自身の感覚を信頼しており、あるいは当の時刻表に書かれている数字等が確認できているということではなければならない。もし自分の感覚が信用できない、数字等が認識できていないというのであれば、依然として私は発車時刻についての私の記憶を確認したことにはならないであろう。自分の感覚が信用できないとするならば、私は他人を参照するかもしれない。この場合、問題の点について他人が述べること、書くこと、行なうことを私の感覚に基づいて同定しなければならない。そしてこのことは、あらゆる同定が結局は感覚に依存しているということを示している。「わたしが同定すべきものが何であれ、つまり対象、出来事、イメージ、記号のいずれであれ、わたしが頼れるのは自分の記憶と現在の感覚だけである。記憶と感覚が相互に確認される程度に違いがあるだけである⁸⁾。こうして、公的な対象の同定がうまくいくとするならば、私的な感覚（例えば痛み）の私自身による同定にも何ら問題はないということになる。私は自分の私的感覚そのものを自分自身で同定できるわけである。

マッギンには、エイヤーのこうしたワイトゲンシュタイン批判に対して反批判する用意がなければならない。同じ解釈をもとに正反対の結論に達しているのだから、それはなおさらである。

たとえば次のように主張されるであろうか。公的な対象と私的な対象の同定には、「記憶の訂正」という点で相違がある。すなわち、公的对象についての記憶の場合にはその記憶の誤りが訂

正されることが可能である。私が、公的な対象、たとえばある車が駐車しているのを見て、「あの車はSという名前の車だ」と一緒にいた友人に言ったとする。しかしその友人は、「あれはSによく似ているが、Sではなく、本当はTという名前の車だ」と反論してくる。友人は当の車を前にして両者の違いを具体的にわたしに説明してくれる。私はその車を見ながら友人の説明を聞き、その車にはSという車にはない特徴があることに気付く。こうして私は、問題の車とそれについての友人の言動を観察することによって、Sという車についての記憶の間違いを正したのである。私的な感覚についての記憶の場合にはこのような訂正の可能性はない。誤りの訂正の可能性が存在しない場合に〈正しさ〉について語ることはできないのであり、それゆえに「私的言語」は言語とは言えないのである。

こうした反論に対してエイヤーの回答は簡単ではないかと思う。つまり、私的感覚についての記憶の場合にもまた誤りの訂正は可能である、と。『探究』第258節の例で言えば、次のような場合がありえると主張されよう。わたしは、ある私的な感覚（感覚a）が生じたときに、日記に「E」と書く。その後である感覚（感覚b）が生じたときに私は、その感覚も前に「E」と日記に書いたときの感覚と同じ感覚であると考え、日記に再び「E」と書き込む。そして、その後さらにある感覚（感覚c）が生じたときに、この感覚cと感覚a・bの記憶を相互に比較することによって、この前の感覚（感覚b）は「E」と名付けた最初の感覚（感覚a）とは少し違っていることに気付く。感覚aと感覚bにはわずかに何らかの相違が感じられるのである。他方、感覚aと感覚cは同一の感じである。わたしは、たったいま生じた感覚cこそが日記に「E」と書くべきものであるというように、私的な感覚に関する記憶の誤りを訂正するのである。

以上の、エイヤーへの反論、ならびにその反論への反論は、マッギンとエイヤーがそれぞれそのような形で提示しているというわけではない。また、エイヤーの主張を正しいものとして認めているということでもない。ただここで指摘したいのは、マッギンが彼の解釈をとりつつ「私的言語の議論」の意義を認めようとするなら、当の解釈に加え、エイヤー批判のためのさらなる議論を必要とするという点である。マッギンはそのことを意識していなかったと思われる。ところでそうすると、マッギンの解釈に従うなら、問題の「私的言語の議論」の提出者本人であるウィトゲンシュタインも重大な誤りに陥っていたということになろう。ウィトゲンシュタインは、「私的言語の議論」と切り離せないであろう重要な問題を、その議論とともに与えてはいないのである。⁹⁾

4

問題は、マッギンとエイヤーの両者がとっている解釈そのものにあると考えられる。かれらは、アンソニー・ケニーが指摘した誤り¹⁰⁾、つまり第258節の「私が将来その結合を正しく思い出す」という箇所を、「私が将来ある感覚に対して〈E〉なる記号を使用するとき、私はその感覚もまた、前に〈E〉という記号を用いたときの感覚と同じ感覚であると正しく同定している」ということを意味しているとする誤りに陥っているのである。ここはそのように解されてはならない。では、この箇所は何を意味しているのか。

第258節の「私は、ある種の感覚が～この記号をカレンダーに書き込む」の部分はいわゆる「私的言語」としての「私的な感覚記号」の導入である。この記号について、その〈定義〉は述べるできないとウイトゲンシュタインは言う。これに対する私的言語擁護者の答えが、自分自身に対してはそれの〈定義〉を〈一種の直示的定義〉として与えうるといものである。この点を理解するために【探究】第256節を引用しよう。

さて、わたしの内的体験を記述し、わたしだけが理解できるような言語についてはどうだろうか。どのようにしてわたしは自分の諸感覚を言葉によって表記しているのか。——日常行なっているようにか。だとすると、わたしの感覚語は、わたしの自然な感覚表出と結びついているのか。——その場合には、わたしの言語は〈私的〉ではない。他人もわたしと同様、それを理解できよう。——しかし、もしわたしに感覚の自然な表出がなく、感覚だけがあったとしたら、どうか。いまや、わたしは単純に名と感覚とを結びつけ、それらの名を記述に用いるのである。——

私的言語擁護者は、名前と感覚を、自然な感覚表出とは関係なく直接的に（直示的に）結びつける事態を考えている。つまり彼にとって、名前の〈意味〉はそれに結びつけられた感覚そのものであり、それ以外の何ものでもないのである。だから、「～という記号は～ということの意味する」といったかたちでの言葉を使った、あるいは感覚のある場所を指しながら「～のような感じのものである」といったような〈定義〉は述べるできない。

では、私的言語の擁護者は具体的にどのように感覚を指し示すことができると、つまりどのようにしてある感覚のある記号の〈意味〉として確定することができると考えているのか。それは、「その記号を口に出したり、書いたりして、自分の注意をその感覚に集中する」という「心の中での指示」によってである。これによって、記号とそれの〈意味〉としての感覚の結合を自分の心に刻み付けることができると私的言語擁護者は考えるのである。

こうして見てくると、問題の「私が将来その結合を正しく思い出すようになる」という部分は、「感覚の同定」について述べているのではなくて、「記号の意味の確定」について論じているのだということが分かる。すなわち、再びケニーの言葉を借りれば、「私が将来その結合を正しく思い出すようになる」とは、「その記号はどの感覚を意味しているのかを思い出す¹¹⁾」ということなのである。

それでは、「私的言語」において〈意味〉を正しく思い出しているということの規準は何なのか。ウイトゲンシュタインはそのような規準はないと言うのである。なぜか？ 例えば、ある語の別の語による翻訳を、想像の中にだけ存在する辞書によって正当化することは可能か。不可能である。ある語を別のある語の翻訳語であると思い出すことを、ただそう思い出しているにすぎないのではなく、実際にそうであるというように保障するのは、そのように想像上に思い出しているということとは別のものである。「正当化というのは、ひとが何か独立したところへ訴えることによって成り立つのである」。また、列車の発車時刻を正しく記憶したかどうかを調べるために、発車時刻表のページの映像を記憶に思い起こすとする。これも正当化とは言えない。この場合、正しい記憶を呼び出さなければならない。ところがここで行なわれるのは、〈発車時刻は

これこれである〉という記憶の正しさを、〈発車時刻はこれこれである〉ということを出し出すことによって確認するということなのである。〈確認されるべき記憶〉によって〈確認されるべき記憶〉を確認しようとしているのである。だが、〈思い起し〉に〈思い起し〉を重ねあわせても、最初の〈思い起し〉が実際に正しいということは確認できないのである。¹³⁾「そこで人は、自分に正しく思われることは何であれ正しいのだ、と言うかもしれない。そしてこのことは、ここでは〈正しい〉ということについて語るができないということではかないのである」（『探究』第258節）。

5

第258節の要点は、「私的言語」には記号の〈意味〉を正しく確定していると言うための規準がないということである。そして、そうした規準がないということがどういうことなのか、第258節のすぐ後に続く第259節での、「私的言語の規則とは規則の印象なのか——印象をはかる秤は秤の印象ではない」というウィトゲンシュタインの発言から読み取れるであろう。つまりこうである。〈規則に従って記号を使っているという印象（感じ）〉が正しいのかどうかを判定するものは、〈規則に従っているという印象（感じ）〉ではない。〈規則に従っている〉（〈記号の意味に則って当の記号を使用している〉）ということにおいては、〈規則に従っているという印象をたんに持っている（感じている）〉と〈規則に実際に従っている〉の区別がなくてはならないのである。〈意味〉を正しく確定していると言えるための規準が存在しない「私的言語」においてはこの問題の区別がその足場を失っているのである。言い換えると、「私的言語」では〈規則に従う〉という概念が機能していないのである。

こうした「私的言語の議論」解釈から逆に、「私的言語の議論」と「規則の問題」の関係についての知見が得られるのではないかと思われる。すなわち、「私的言語の議論」の核心が、マッギンの考えるような、「語を私的な対象に適用する実践を行なう可能性」の排除にあるのではなく、「私的言語」と言われる「言語」においては〈規則に従う〉という概念が無意味なものになっていることを示すことにあるとすると、「私的言語の議論」は〈規則に従う〉という視点を介して根底的に「規則の問題」とつながっていると考えられるのである。

「規則の問題」では、そもそも〈規則に従う〉ということはどういうことかという点が考察されている。それは、〈規則に従う〉とはこれこれこういうことであるという説明が引き出される過程である。これが、先に引用した第202節が重要視される所以である。というのはこの節で、〈規則に従う〉ということは〈実践〉であり、〈規則に従っていると信じている〉ことは〈規則に従っている〉ことではないと主張され、その後で「それゆえに、人は規則に〈私的に〉従うことができない。さもないと、規則に従っていると信じていることが、規則に従っていることと同じことになってしまうだろうから」（〈私的な規則遵守の否定〉）と言われているからである。そして、〈規則に従う〉という概念の無意味性から「私的言語」の言語としての不適格性を導く「私的言語の議論」の議論と実質的に同じ議論がここにおいて見て取れると考えられるのである。

「規則の問題」に続く「私的言語の議論」の位置付けは次のようになろう。つまり、「規則の問

題」における〈規則に従う〉という点についての一般的な考察に対して「私的言語の議論」では、私的言語の擁護者によって「私的言語」のまさに具体的事例であるとされるであろう「感覚語」について〈規則に従っている〉ということが言えるのかどうか¹⁴⁾が具体的に問題とされているのである（もちろん「私的言語の議論」には「私的言語」の問題と関連してその他様々な議論が織り込まれていると考えられるが、本論では「私的言語の議論」の中心的論点を「私的言語」の問題と捕らえて論を進めているのである）。

こうした解釈は、「私的言語の議論」の根本は、それに先立ち、より一般的な議論である「規則の問題」にあり、「私的言語の議論」は感覚についての特殊な事例であるという冒頭で述べたクリプキの趣旨にそうものである。

6

さて、「規則の問題」が「私的言語の議論」の基本的前提をなすというクリプキの主張にはさらに、〈私的〉という概念を〈社会的〉という概念に対比されるものとして使用する（いわゆる〈言語の共同体説〉）という側面が含まれている。最後にこの点を瞥見して、本論を閉じることにする（本来この〈言語の共同体説〉の問題は本論とは別に改めて取り扱われるべき論点である）。

クリプキによれば、「私的言語の議論」で否定されているのは、〈規則に従っている〉ということについての「私的モデル」、つまり「ある人がある与えられた規則に従っているという概念はたんに、その規則に従っている人、そしてその人のみに関する事実によって分析されるべきであり、より広く彼は共同体の一員であるということに言及する必要はない¹⁴⁾」という考え方である。言い換えると、「(物理的に共同体から切り離されていようと、いまいと) 共同体から切り離され孤立して考えられた個人については、規則に従っているということを言うことはできない¹⁵⁾」のである。ある人がある言葉に関してある一定の状況の下で〈共同体〉の他の人たちと〈一致した〉行動をするかぎり、その人について「彼はその言葉の意味を把握している(規則に従っている)」といった発言がなされるわけである¹⁶⁾。そして、我々は結果的に言語使用において一致するというどうしようもない「生の事実」こそが、「相互に規則とか概念の把握を認める我々のゲームにとって本質的なのである¹⁷⁾」。その人だけ孤立して考えられた個人には〈規則に従っている〉ということについての言明が適用できないという意味で、「私的言語」はすでに「規則の問題」第202節の段階で拒否されているというのがクリプキの主張なのである。

さて、『探究』には「共同体」という言葉そのものは見られない（その他の著書・論文等についても同様であろう）。しかし、〈言語の共同体説〉を検討する上で、「規則の問題」の箇所最後の三つの節（第240～2節）に特に着目すべきであろう¹⁸⁾。第241節では次のように論じられている。

「それだからあなたは、何が正しく、何が誤っているかを、人間の一致が決定すると言っているのだな。」——正しかったり、誤っていたりするの、人間の言っていることだ。そして、言語において人間は一致するのだ。それは意見 (Meinungen) の一致ではなく、生活の形式 (Lebensform) の一致なのである。

マッギンはこの節から、「共通言語の存在は、一定の仕方で行動するという共有された一連の非反省的で自然な傾向に依存している¹⁹⁾」という言明を引き出している。彼は、「生活の形式の一致」を、「共有された一連の非反省的で自然な傾向の一致」と解釈するのである。つまりここで、それぞれの人間が一連の自然な傾向を持っていて、それは人々に共通したものととして一致していると主張されているのであろう。しかしながら、これは誤解ではないのか。もしマッギンが言うように、人々がそれぞれ自然の傾向を持っていて、それが人々の間で一致しているというのなら、「生活の形式」は複数形になるべきではないのか。ところが、実際にはそれは単数形になっているのである。しかも、ウィトゲンシュタインは、「意見」（複数形）の一致ではなく、「生活の形式」（単数形）の一致であるというような、対比的な語り方をしているのである。

この節は次のように解するのがよいであろう。つまり、「生活の形式の一致」とは、「人々の間の、論証といったものを介さないどうしようもない一致」なのである。そして、言語というものを支えているのはまさにそうした一致にほかならない。言い換えると、そうした〈一致〉が、「我々の言語の働く足場になっているのである」（『探究』第240節）。我々は言語でもって正しいことや間違ったことを語るのであるが、ウィトゲンシュタインがここで言っている〈一致〉とは、それでもって正しいことや間違ったことを語る言語そのものの根底をなす〈我々の間の一致〉なのである。すなわちそれは、言語の使用において「意味を把握している」とか、「規則に従っている」とか言うことを支えているものであると考えられる。

こうした解釈はクリプキの考えと合致するものである。不十分な考察ではあるが、とりあえず〈言語の共同体〉という点においてもクリプキに与することになったわけである。²⁰⁾

注

*ウィトゲンシュタインからの引用は Suhrkamp 版に依拠した。なお、引用文中の〔 〕内の語句は引用者の補足であり、傍点のあるものは原文ではイタリック体になっている。

- 1) Saul A. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language* (Harvard University Press, 1982), p. 3-6.
- 2) Colin McGinn, *Wittgenstein on Meaning* (Basil Blackwell, 1984), p. 51.
- 3) Ibid., p. 42.
- 4) Ibid., p. 49.
- 5) Ibid., pp. 48-49.
- 6) A. J. Ayer, "Can There Be a Private Language?" in Stuart Shanker ed., *LUDWIG WITTGENSTEIN: Critical Assessments, Volume Two* (Croom Helm, 1986), 242.
- 7) Ibid. and Ayer, *LUDWIG WITTGENSTEIN* (PELICAN BOOKS, 1986), pp. 75-77. 後者を AW と略記する。なお、この例はもともとは『探究』第265節で述べられているものである。
- 8) AW, p. 76.
- 9) クリプキもまた、マッギンの立場とそれに対立するエイヤーの議論に言及している (Kripke, op. cit., n. 47)。しかし彼は、この対立をどう見るべきかという点に関して本論で述べるようなかたちで具体的に「私的言語の議論」の部分を考察してはいない。
- 10) Anthony Kenny, *Wittgenstein* (Harvard University Press, 1973), p. 191.
- 11) Ibid., p. 193.
- 12) このアナロジーは『探究』第265節からのものである。その他第266～7節を参照。
- 13) ウィトゲンシュタインはこの点について、「それは、今日の朝刊が真実を報道していることを確か

めようとして、それを何部も買い込むようなものである」（『探究』第265節）と説明している。本論の解釈からするとこの朝刊の比喻は次のように理解されるであろう。つまりその比喻は、ある新聞社の朝刊の記事が真実であるかどうかを確かめるために、その新聞社とは別のいくつかの新聞社の朝刊を買うということではなくて、真実を確かめようとしている朝刊と同じ朝刊を何部も買って最初の朝刊の記事の真実を確かめようとするということについて語っているのである。

14) Kripke, op. cit., p. 109.

15) Ibid., p. 110.

16) Ibid., pp. 95-96. 以前規則に従う共同体のメンバーであったが、今は共同体に参加せずに、孤島でたった一人で生活している〈ロビンソン・クルーソー〉についてクリプキは、「もし我々がクルーソーを規則に従っていると考えれば、我々は彼を我々の共同体に受け入れ、そして規則に従っているということについての我々の規準を彼に適用しているのである」（ibid., p. 110）と述べている。クリプキのこの議論は、規則に従う共同体のメンバーに一度もなったことのない人（たとえば〈ロムルスとレムス〉）についても当てはまるであろう。

17) Ibid., p. 96.

18) その他、『探究』第244～5節も重要であろう。また、『数学の基礎についての考察（*Bemerkungen über die Grundlagen Mathematik*）』第Ⅵ部第41節には次の論述が見られる。

確かに、私は私自身に規則を与え、それに従うことができる。しかし、人間の関係（Verkehr）において「規則」と呼ばれるものにそれが類似しているという理由だけから、それは規則なのではないのか。

19) McGinn, op. cit., p. 55.

20) クリプキの議論における、本論第5・6章で述べられた以外の側面、例えば「懐疑的パラドックス（sceptical paradox）」とか「懐疑的解決（sceptical solution）」とかいった表現に関しては問題点が見受けられる。これに対して当論文では、『探究』の「規則の問題」と「私的言語の議論」という二つの部分の関係をどう考えるかという点についてクリプキの説に妥当性が認められたのである。